

にわかラグビーブーム

「ラグビー史上最大の番狂わせ」、さらには、「スポーツ史上最大の番狂わせ」とまで言わせ、世界中に即日、驚きをもって報道が駆け回った。ラグビーワールドカップでのひとこま、というより、最初の試合での出来事だったから、南アフリカのみならず、世界中を驚愕が走った。単なるフロックとも思われた。しかし、番狂わせがない、のがラグビー界での常識だから、この週の最大のニュースになった。

かつて、大学ラグビーの試合を見ていて、突進してくる選手に対し、まるで逃げ腰でタックルに行った選手がいて、しかもそのチームの主力選手だった。さらには、将来の全日本代表候補だったことがあって、これでは日本のラグビーの前途は暗いといしか言いようがなかった。

初戦、南アフリカ戦でもおなじようなことだが、今大会でも、オールブラックスに対してなど、100点、いや50点で抑えられたら善戦のうちだろう、くらいに思っていた。ところがである。序盤スクラムで押し勝ち、認定トライを奪った。「嘘!？」

ところが、相手が得点するたびに追いつき、すでに試合時間の80分に近い。あとワンプレー。反則（ペナルティ）をとられたら終わり。この時点で、相手の選手がシンビンで事実上退場である。エディ・ヘッドコーチの指示は同点をねらったのペナルティキックだ。ところが、この試合を通じて身をもって手ごたえを感じていたのだろう、リーチ主将はトライを狙いに行った。たったひとつのミスがあっても敗退する。数分間にわたってパスをまわしたり、モールを組んだり、離合集散し、相手を翻弄する。（観ているこっちはドキドキである。）そして83分、ついにゴール隅っこにトライをきめたではないか。絵に描いたような逆転トライである。

観客は、ラグビー発祥の地イングランドでの開催だからラグビーをよく知っている。終了15分前ごろからJAPAN、JAPANの大コールである。ちょっと感動したな。

これが、「世紀の番狂わせ」になった。

あとスコットランド戦であるが、この試合は中3日である。後半半ばまでは互角だったが、終盤にはスタミナ切れで敗退してしまった。これが、せめて中1週間なら、あるいは勝っていたかもしれない。その理由は以下の通りである。

第3戦は体力で優勢で、技術的にも優れているサモアが相手である。この試合では、前半20対0でリードする。圧勝である。その前日、テレビの質問に対し、個人技では引けを取らない。「勝ちますでしょうか？」の質問に大畑が、「勝てるではなく、勝ちます！」

ついで米国相手に、これも体格で圧倒的に不利である。それでも快勝した。サモア戦での終盤の「Nippon,Nippon コール」もよかった。

さきのスコットランド戦で残念なのは、あれほど日本が快勝したサモアがスコットランドにわずか1ゴール差で敗れたのである。良い条件でだったら・・・

ヘッドコーチのエディ・ジョーンズは当然の結果と考えていたらしい。また選手も、南アフリカ戦で、いつ頃「これはいけるかな？」と思ったかと尋ねられ、（聞いている側は、試合の終盤くらいに思っていたらしい）試合開始早々のコンタクトで、これはなんとかなるのではないかと考えていたらしい。・・・・・・それほど日本の力が上がっていたことが証明されたのである。

強いチームとテストマッチをしなければ強くなれない。ところが日本相手ではむこうが相手にしてくれない。しかし今後は違ってくるだろう。

なろうことなら、この、世界で最も烈しい練習をしてきたチームとオーストラリアのワラビーズやニュージーランドのオールブラックスと戦わせてやりたかった。負けるかもしれないが、相手を脅かす存在になっていただろう。

今回の大会では、南半球の4チームがベスト4に残った。アルゼンチンは、それほど強いチームではなかったが、繰り返す南半球大会で強豪との戦いで力をつけて来たに違いない。

一気に人気者になった五郎丸選手は、ルーティーンと称して独特のゴールを狙うキックの前の仕草で話題になり、日本でのオフシーズンにオーストラリアのチームでプレーすることに決めた。ニュージーランドに留学しているチーム一小柄な田中は、倍くらいの選手の突進に臆することなく真正面からタックルに行き、結局は押しつぶされてトライを許したのだが、この勇敢さをみれば、当初の大学選手の臆病さが際立ってくる。

4年後には日本でワールドカップが開催される。・・・・これも大会前には、日本ではラグビー人気もその実力もいまひとつだから、南アフリカで開催しようという動きがあったらしいが、初戦でこの話は雲散霧消してしまった。今後は、世界

中が日本を研究し、より厳しい試合の連続になるだろう。

今回のチームの特徴のひとつが、外国人選手の多さである。数年前にスコットランドかどこかに勝った時、NHKのアナウンサーが、「この次は日本人だけのチームで勝って欲しい」と本音を言って、玉木さんにたしなめられたことがあるが、日本の国籍を獲得して出場した選手も多い。アナウンサーが野球やサッカーと同じように考えていることがわかるが、スポーツを理解していない。

ワールドカップでいえば、上位に食い込む可能性はサッカーをはるかに超えている。ヘッドコーチにだれになるかも含め、2019年の大会が大いに期待される。

2015.09.

国民性だろう、実業団のトップリーグでの観客が急増している。ルールがわからない、とかいうが、当の代表選手が「自分もまだ全部はわかってはいません。」大阪は花園ラグビー場がある。

このブームは当分続くだろうが、一過性に終らせてはいけない、と思う。

ラグビーは、グラウンドが土であろうが芝生であろうが、台風や災害でもないかぎり、雨が降ろうが槍が降ろうが中止になることはない。やや長い半ズボンでださいことこの上ない。ジャージが泥んこになったら、敵か味方かわからなくなるくらいである。

その点、アメリカン・フットボールは、芝生に防具でガチガチに、まるで鎧のように重装備して闘っている。その上カラフルで、米国が本場だから、見るからに華やかである。その点、ラグビーは、肉体を直接ぶつけ合う。一説に、全速力で疾駆するもの同士がぶつかる時、17トンもの力が加わるという。

ラグビーとアメリカン・フットボール（アメラグ）との違いはいくつかあるが、ラグビーでは、キック以外の方法でボールを前に前進させてはいけない。これが、試合中にしばしばみられるノックオン（Knock on）である。ボールを前に落としたり、「キック以外の方法で前進させた」ことになる。無論、前方に投げることもできない。

これに対し、アメリカン・フットボールの場合は、後ろへは何回投げてもいいが、前方に投げるのが1回だけみとめられている。だから、クォーターバックからの40ヤードのパスなどと表現される。

もうひとつの違いは、ラグビーではボールを持った選手以外の選手にはタック

ルしてはいけない。一方アメリカン・フットボールでは誰に対してもタックルすることができる。身長 2m 体重 130kg というような選手が、いきなりぶつかってくるのだから、鎧で身を護る必要があるのである。

すべてのスポーツでは、体格が優れている、つまり大きい選手のほうが有利である。ただ繊細なプレーには欠けるところがある。小柄な選手は小回りが効くから、違った意味での起用が必要になる。ラグビーのフォワードの選手は特に身体が大きい。事実かどうか、その選手たちが 4~5 人かたまって歩いていると、向こうから来たチンピラがコソコソと道を空けたという。……それはそうだろう、彼らは肉弾戦のプロなのだから。

世界三大スポーツの祭典とは、オリンピック、サッカーの世界カップ、そしてラグビーの世界カップである。白洲次郎の言葉に、サッカーは **Rough men play gently** ラグビーは、**Gentleman play roughly** というのがある。つまり、サッカーとは、がさつな連中がフェアプレイ精神で紳士的に試合をする。一方、ラグビーは、紳士が荒々しく試合をするものだ、というものである。彼はラグビーが好きだったようだ。